佳作

父さん、ありがとう

鹿児島県
伊仙町立面縄小学校　二年
田中　大陸

「ナイス、キャッチ。」
今日も、父さんの元気なこえが校ていに大きく聞こえてきます。
ぼくの父さんは、毎日しごとがおわると、いそいで、ぼくの小学校に走ってきて、やきゅうぶのコーチにへんしんします。
ぼくが、一年生になった夏、
「父さん、やきゅうぶに入りたいよ。だめかな。」
と言うと、ビールをのんでいた父さんが、じっとぼくを見て、
「そうか。わかった。わかった。」
と言って、かんとくさんにおねがいしに、家まで行ってくれました。
二年生にならないと入れないやきゅうぶですが、ぼくを入れるかわりに、父さんもコーチをひきうけてくれるように、かんとくさんからたのまれたそうです。
父さんは、しごとのほかにも、牛のせわをしているので、ひきうけるのをまよっていましたが、ぼくのために、よろこんでひきうけたと母さんに、聞きました。
ある朝、ぼくは、目ざまし時けいのセットをまちがえて、五時に目をさましました。
外はまだ夜みたいに、まっくらで、うちの中は、シーンとしています。時けいの音が、
「チックタック。チックタック。」と大きく大きく聞こえています。
となりにねていた父さんが、どこにもいません。
ぼくは、「あれ。父さん、どこへ行っちゃったのかな。」と思い、ぱっと、とびおきて、いえ中をさがし回りました。それでも、父さんは、いません。
また、ふとんにもどって、気もちよくねていた母さんのかたをりょう手で、なんどもゆすって、
「ねえ。父さんが、いないよ。」となきそうな顔で言うと、
「父さんは、牛ごやに行ったよ。」とねむそうなこえで答えました。
「えっ。どうして。」と聞くと、母さんは、ゆっくりおき上がり、ぼくのかたに手をおき、
「しごとがおわって、夕がたの五時からすぐに、りくたちのやきゅうを見に行けるように、いつも父さんは、朝早くおきて、牛のせわと草かりをしてるのよ。うれしいよね。りく。」
と話してくれました。
「えっ。うっそお。本とうなの。」とぼくは思わず、大きなこえでさけびました。
父さんは、ぼくのために、ねる時間をけずって、まっくらな中、畑で一日分の草かりをしたり、牛にえさをあげたりしていたのです。
ぼくは、心がキューンとなり、目からぽろぽろなみだがながれてきました。
いつもは、ぼくにとてもきびしいことばで、
「りく。ごはんをのこすな。」
とおこったり、いもうととけんかしているときは、こわい顔で、
「いいかげん、やめれって。」
としかる父ですが、本とうはいつも、ぼくのことを考えているやさしい父さん。
ぼくは、これからも父さんと「しょにがんばるよ。ありがとう。